

瀬戸地区・南新谷

瀬戸川を挟んで尾張瀬戸駅の南側に広がるまち並みです。瀬戸蔵のある場所は、江戸時代後期には御蔵会所があり、明治時代以降は役場や警察署などが軒を連ねていました。現在は、文化センターや美術館など文化施設が多い場所です。



瀬戸蔵ミュージアム

瀬戸蔵の2・3階にある、やきものを中心とした歴史博物館です。面積は、瀬戸蔵の2階と3階の二つのフロアをあわせて約1,800㎡で、2階部分には、せともの的大量生産で活気のあった時代の瀬戸をイメージし、まちの象徴である旧尾張瀬戸駅、工場（モロ）、石炭窯、煙突などを配置しています。3階部分は、1000年以上の歴史がある瀬戸焼の変遷を全長30m以上の大パノラマ展示で紹介しています。平成25年（2013）に博物館法に規定する博物館相当施設に指定されました。

開館時間：9:00～17:00（入館は16:30まで）

入館料：一般：520円、高校・大学生・65

休館日：月1回程度臨時休館あり、年末年始

歳以上：310円、中学生以下・妊婦・

駐車場：有（有料：1時間無料、以後60分ごとに100円）

障害者手帳をお持ちの方は無料



陶器



磁器



創造



街



交流



自然



祭り

御蔵会所跡



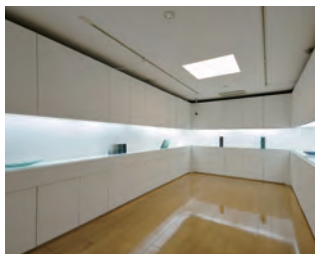
御蔵会所遺跡出土遺物
(瀬戸蔵ミュージアム)

御蔵会所は、享和元年（1801）に始まった尾張藩陶磁器専売制度（蔵元制度）により、陶磁器製品を納入・検品・積み出しを行う施設として設置されました。御蔵会所は当初、瀬戸村・赤津村・下品野村に設置されていたましたが、文政9年（1826）に瀬戸村の御蔵会所に統合されました。文政年間の瀬戸村絵図には荷小屋とその後順次増築された下物小屋・絵薬土蔵・灰釉小屋など10棟以上の建物が描かれています。明治以降は役場や警察署、陶磁器陳列館などが建設され、行政・文化の中心地となっています。現在の「瀬戸蔵」建設の際に発掘調査が行われ、御蔵会所の柵跡の一部が発見されています。

省営バス発祥の地



昭和5年（1930）、岡崎、瀬戸記念橋～高蔵寺間および多治見間で全国初の省営バスの運行が開始されました。省営バスは、鉄道省が鉄道敷設の代替措置としてバス路線を計画したもので、岡崎～多治見路線は、岡崎を出発して八草を通り幡山村から瀬戸町へ。瀬戸町では殿川町～瀬戸記念橋～瀬戸公園を通り、品野町から上半田川口、下半田川町を通過して岐阜県に入りました。このことから記念橋は省営バス発祥の地とされています。省営バスはその後国鉄バス、JR東海バスへと変遷しますが、この路線を走った「第1号車」は国産車で、名古屋市市の「リニア・鉄道館」に現存する最古のバスとして保管、展示がされています。



💡 新世紀工芸館

次世代の陶芸、ガラス工芸の担い手を育成し、市内外からの人々の交流の場、観光拠点として平成11年（1999）5月28日に開館しました。展示棟、交流棟、工房棟からなり、研修生の受け入れ、各種企画展、イベントなどを行っています。展示棟は、大正3年（1914）に建造された旧瀬戸陶磁器陳列館を再現したもので、若手作家の作品を中心とした企画展が行われています。また、交流棟では作家の器を使用したカフェや季節に合わせた陶芸・ガラス作品の展示販売を行っています。

開館時間：10:00～18:00

入館料：無料

休館日：火曜日、年末年始

駐車場：有（有料：1時間無料、以後60分ごとに100円）



陶器



磁器



創造



街



交流



自然



祭り



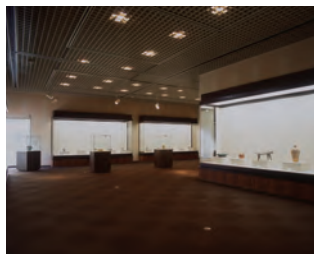
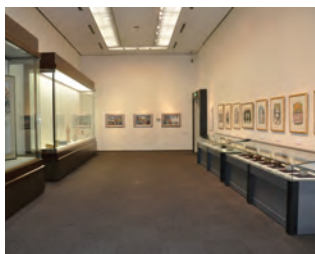
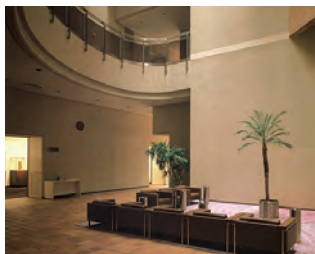
瀬戸市文化センター

昭和 57 年（1982）に、瀬戸市制施行 50 周年記念事業の一環で、文化の発信拠点施設として開館しました。文化ホール・文化交流館・美術館 の 3 棟からなります。正式名称は尾張東部（瀬戸）地域文化広場。

開館時間：9：00～21：30

休 館 日：毎月第2火曜日

駐 車 場：有



瀬戸市美術館

瀬戸市美術館は陶磁器をはじめ、絵画、彫刻等美術作品全般の展示を行っています。開館以来、常設展のほか、地元作家を中心とするさまざまな企画展を開催しながら瀬戸市の文化情報の発信を担ってきました。また収蔵品は、瀬戸市にゆかりの深い作家を中心に陶芸・絵画・彫刻等 1,000 点以上を数えます。平成 25 年（2013）に博物館法に規定する博物館相当施設に指定されました。

開館時間：9:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日：毎月第2火曜日

駐車場：有

入館料：特別展・企画展により入館料が異なります。中学生以下・妊婦・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方は無料



陶器



磁器



創造



街



交流



自然



祭り



萩御殿の森

明治後期、愛知県では大規模な禿山復旧工事が始まります。瀬戸町と山口村の境にあった小高い丘陵はこうした工事が見渡せる場所にあったため、多くの視察者が利用し、周りに萩を植えた小屋を建て、「萩の茶屋」と呼ばれるようになりました。明治43年（1910）に東宮殿下（後の大正天皇）が瀬戸へ行幸され、萩の茶屋において工事をご覧になり、若松のお手植をされました。それを記念するため、萩の茶屋を「萩御殿」と呼ぶようになりました。町名の「萩殿町」はこれに由来しています。平成16年（2004）に「萩殿の森」として明治期の砂防工事跡を知ることができる防災林として整備されました。



秋葉神社常夜燈（市指定文化財 / 建造物）

窯場の多い瀬戸では火の信仰に厚く、秋葉社を祀り、また秋葉講代参が盛んに行われていました。窯に火入れをする際には、慶昌院秋葉本殿（それ以前は熱田秋葉門通寺）から付け木とマッチ（火打石）を受けていました。この秋葉神社は郷・南新谷の聖地であり、境内に市指定文化財建造物である常夜燈があります。棹の4面には「秋葉山 常夜燈 島中安全 文化十一年申戌九月吉日」と刻まれており、瀬戸市内の常夜燈の中では最も大型で、文字の彫りが深くて美しいものです。花崗岩製で、この時期の当地方の石造物は高遠（伊那谷）系の石工技術によるものといわれています。



陶器



石器



創造



街



交流



自然



祭り



瀬戸陶磁器会館

建物は旧瀬戸陶磁器工業協同組合の「総合協同販売所見本陳列場」として昭和10年（1935）に完成しました。陶磁器の計画的な生産と協同販売を目的に、大正15年（1926）に設立されたのが瀬戸陶磁器工業協同組合です。建築当初は1階に事務所・役員室・応接室、2階に見本陳列室と会議室、3階に大ホールが設けられていました。北玄関の中央部分やホール等に当初の意匠が残され、北玄関外部を門型に飾るテラコッタ装飾や、腰壁のタイル、陶板装飾とともに旧状を残しています。昭和天皇が昭和21年（1946）の行幸時にこの建物の屋上から瀬戸のまち並みを視察されています。現在は愛知県陶磁器工業協同組合の事務所となっています。

栄国寺



曹洞宗大平山栄国寺。白塗喰塀と山門が尼寺らしいやさしい佇まいをみせています。明治34年(1901)水野常倫禅尼師の建立によるもので、尼僧衆研鑽の場として全国的にも有名な寺です。本尊は見代り地蔵、御たすけ地蔵として知られる石仏延命地蔵願王菩薩で、お札を傷の箇所をさすって川に流すと地蔵が身代りとなって悪病が去ると言い伝えられています。年中行事としては地蔵盆大祭の他、花まつり、大般若会、御涅槃会、施餓鬼、両彼岸会があります。

瀬戸地区南新谷の遺跡

桂蔵窯跡



瀬戸市の中央部、瀬戸川左岸の標高125m前後の北向き丘陵に立地しています。確認調査が行われ、連房式登窯とそれにとまなう作業場と考えられる平坦面が確認されています。出土した遺物は碗・皿・鉢類を中心とした瀬戸村では一般的に生産されたもので、その年代から18世紀後葉から19世紀中葉に操業した窯であることが明らかにされました。江戸時代に使用された連房式登窯は、現在の市街地周辺に多く築かれていましたが、近年の開発によりその多くが失われました。そうした中、本窯跡は現代に残された数少ない江戸時代の遺産といえます。

瀬戸地区・南新谷地図



- ①瀬戸蔵ミュージアム (P43)、御蔵会所跡 (P44)、省営バス発祥の地 (P44)
- ②新世紀工芸館 (P45)
- ③瀬戸市文化センター (P46)
- ④瀬戸市美術館 (P47)
- ⑤萩御殿の森 (P48)
- ⑥秋葉神社常夜燈 (P49)
- ⑦瀬戸陶磁器会館 (P50)
- ⑧栄国寺 (P51)
- ⑨桂蔵窯跡 (P51)